

大阪国際大会の舞台裏

2004年5月23日から26日にかけて、事前登録者数47,000名という、ロータリー史上未曾有の規模で大阪国際大会が開催されました。大成功だと賞賛する人、最低の大会だと酷評する人、その評価はさまざまですが、最初から直接関わった一人として、この大会を振り返ってみたいと思います。実はこの文章は大会直後に書き下ろしたのですが、当時発表するには差しさわりの多いと考えて、お蔵入りにしておいたものです。大会が終了して5年以上も経ったのですべて時効と考えて公開することにしました。

日本に国際大会を誘致する第1報を聞いたのは、私がガバナー・エレクトとしてアナハイムの国際協議会に参加した1996年2月のことです。協議会の4日目か5日目に、アナハイム・ヒルトンの今井理事の部屋に全員が集まって歓談中にラージ事務総長が来室して、理事会の議題に日本が国際大会の候補にあがったことが報告され、皆で大喜びをしました。一旦候補にはのぼったものの、決して順調にその話が進んだわけではありません。他の国も誘致運動を進めていましたし、日本でも幾つかの都市の名前が候補としてあがっていました。1997年の夏ごろには、日本の関西地区で行うという可能性が高まり、内内にその準備作業が始まりました。まずは、1978年に東京で開催された国際大会の状況を把握しようということになり、関西4地区のガバナーとパスト・ガバナーが集まって、東京大会の16ミリ映画や各種の資料を検討しました。

大会を関西に誘致するという話が具体化した段階から、会場をどこにするのかという問題が起こってきました。京都、神戸は何万人も入る会場がないため、大阪で開催することになり、開会式は当時建築中の大阪ドームで、その他の行事はセッションも含めてインテックス大阪で行うことになりました。

会場が内定してから1-2年後にユニバーサル・スタジオが完成し、それにアクセスする道路が慢性的に大渋滞するという報道が、マスコミによって流されました。インテックス大阪に通じる道路がまさにその道路に当たることや、その他諸々の事情も加わって、結局会場はリーガ・ロイヤル・ホテルと国際会議場に変更となりました。結果的には、マスコ

ミの予想は大きく外れて、ユニバーサル・スタジオは閑散としており、交通渋滞は全くない状況だったので、大会参加者の交通手段の利便性や会場設営の問題から、この会場変更は大きく悔やまれてなりません。

会場を決める作業と平行して、地本が負担する費用の算定が行われました。大会費用については RI 負担分とホスト負担分の詳細が定められており、ホスト負担分として約 16 億円が必要であるという結論になりました。日本の全会員から 1 万円、ホスト地区の会員から 2 万円頂くことになり、毎年 2,000 円ずつ 5 年間で徴収することが 1998 年のガバナー会です承されました。

外国で開催される国際大会では、巨大な敷地を持つ国際会議場やドームが一体化された会場が、無償もしくは破格な使用料で提供されているケースが多く、主催者側にとっても参加者側にとっても、利便性、費用負担共に大きなメリットが与えられていたのですが、この大会ではそうはいきませんでした。ドームの賃貸料一つとっても、準備、撤収を含めて 7 日間借りることとなり、1 日 5,000 万円と計算しても 3 億円以上の費用がかかることになります。

大会の名称決定も二転三転しました。国際大会は単独の都市が誘致するケースが普通ですが、今回は関西エリアの 4 地区が合同で誘致したため、当初は関西国際大会という呼称を使っていたのですが、「関西」という言葉が外国人に理解しにくいという理由から、正式名称は大阪国際大会、ただし日本人は 2004 年国際大会(関西)の呼称を使っても良いことになりました。

胸につける ID カードも大きな問題でした。過去に開かれた RI の会合では、ニックネームが大きな文字で書かれていました。しかしこの大会に参加するロータリアンの大部分は日本人ですし、日本には愛称で呼ぶ習慣はありませんし、姓は知っていても名前までは知らないケースが多く、「Takeshi タケシ」と呼ばれても、とっさに自分のことだとは思いません。RI との最初の折衝で、日本人に限って姓を使うように要望しましたが、ノーという答えが返ってきました。この名札作成の業務は RI の仕事なので、こちらが勝手に作ることはできません。でも粘り強く交渉した結果、今回に限って姓が書かれることになりました。

もっとも外国人がおこなった作業ですから、姓と名との区別がつかず、名前表記になっている人も沢山あったようです。

当初、この国際大会の登録業務を IT 化しようという発想がありました。ID カードに IC チップを埋め込んで、登録、登録料、各種会合、有料イベント、交通パスなどを一元化して管理しようという考えでほぼ準備は完了していたのですが、大会直前になって費用の問題で実現しませんでした。名札と登録の IT 化私が直接担当した分野であり、このシステムを導入しておけば、今後の国際大会に大きな威力を発揮できたのにと残念な思いです。

すべての作業は RI が作成したマニュアルに基づいて進められるため、ホスト委員会が提案した日本の文化や地域性を重視した企画はほとんど拒否され、非常に悔しい思いをしました。喧嘩に近いような交渉を連日続けながら、大会が間近に迫ってきました。

当初予測した参加者は、日本 35,000 名、外国 15,000 名でした。15,000 名の外国人が大阪市内のホテルに宿泊するとほぼ満杯となるために、日本人は神戸や京都に泊まり、第一次事前登録の締切り後、空室があった場合のみ大阪に泊まれることになりました。実際には、日本の 35,000 名は的中しましたが外国からは 10,000 しか訪れませんでしたので、日本人は早めに事前登録した人は遠い場所に、遅く登録した人は大阪のホテルに泊まれるという皮肉な結果になりました。

RI の要請(命令)によって、毎日午前中に開かれる本会議が大阪ドームで行われることになったため、大阪ドームと、友愛の家や各種のワーク・ショップが開かれるリーガ・ロイヤル、国際会議場間の輸送をどうするかということが、大きな問題になりました。

他府県に住んでいる人には想像がつかないかも知れませんが、大阪の交通事情は極めて悪く、市内は日常的に交通渋滞が起こっています。特に五、十払いといって、末尾に 5 と 0 の付く日はほとんど車が動かないといった大渋滞が起こります。従って大会期間中、市内のホテルや二つに分断された会場間に大量のシャトル・バスを運行することは不可能に近く、最終的にシャトル・バスは外国人参加者専用として、日本人は公共交通機関を利用することが決定しました。

その代わりに日本人参加者には関西圏乗り放題の無料パスを支給することになりました。と言っても、大阪ドームに行くには最寄の JR 大正駅から歩いて 15 分、地下鉄は乗り継ぎ

が難しく、地元の我々でも迷う有様、国際会議場に行くには最寄の JR 福島駅から歩いて 20 分、更にチャーター・バスやタクシーは交通規制をかけるので利用できないというお達しまでで、日本人の参加者に大きなプレッシャーをかける結果となりました。実際はリーガ・ロイヤル・ホテル周辺の交通規制はなく、タクシーもバスも自由に出入りできたのには、いささか拍子抜けしました。しかし、こういった事前の PR が効を奏して、大きな混乱が起こらなかったことは幸いでした。

水の都大阪には、沢山の川や運河があり、船を使ってはという案もでしたが、大阪ドーム周辺は河口に近く、満潮時には船が橋の下をくぐるできないという理由で立ち消えになっていましたが、大会直前になって、潮位の低い時間帯に限って、国際会議場と大阪ドーム間をボートが運行することが決まりました。ただし、定員も少ないので、緊急を要するホスト委員会の人たちを優先することにして、一般参加者にはほとんど知らされなかったもので、これを利用したロータリアンは僅かだった模様です。私は連絡業務で 2 往復しましたが、地上の混雑とは別世界の、極めて快適な船旅でした。

とにかく、会場が二つに分断された影響は大きく、例年の国際大会では当然とされている、午前中は本会議、午後からは友愛の家やワーク・ショップという流れが、どちらか一方で終わりという結果になったことは、まことに残念なことです。

友愛の家や各種のブースをホテルに設置したために、いろいろと弊害が起きました。例年の国際大会ならば広い会場に設営されたブースを順番に回ればよかったのですが、ホテルの小部屋に分散されたブースでは、どこに何があるのかが分かりにくく、奥まった部屋を割り当てられたブースには、訪れる人もまばらという結果になりました。3 階の物販ブースもイベント会場も極めて狭く、椅子の数もまったく不足、これが 45,000 人の国際大会かと疑うような設営でした。例によって 2 日目以降の日本人の数が激減したため、なんとか処理できたものの、会場の狭さが致命的な欠陥でした。

過去の国際大会を見ると、日本人の大会参加者の大半は旅行業者のパック・ツアーで参加します。大会参加は開会式と、せいぜい残っても翌日の午前中までで、後は観光旅行に出かけて行きます。この行動パターンはロータリーの世界でも有名になっており、マジア

べ会長は、せめて国内で開かれる大阪大会だけは全期間出席するようにと要請しましたが、その不安は的中し、2日目以降の会場で、ホスト委員会やボランティアとして活躍している人以外の日本人の姿は激減しました。大阪大会に旅行会社のパック・ツアーで参加する日本人は少なく、ほとんどの人は自分でプランを立てて参加しているはずで、75%以上も登録したホスト地区の会員の数だってかなりのものです。そんな人たちのほとんどが、開会式だけに参加して、後は欠席というプランを立てたことになります。参加者の75%以上を占める日本人のほとんどが消えてしまったのですから、大会に全期間出席することを当然の義務として参加している外国人は、どう感じたのでしょうか。閉会式でマジアベ会長が発言した日本人の参加者の少なさに対する批判も当然のことです。この事実が、今後日本人に対する評価として残ることが心配です。

当初の計画では、皇太子殿下ご夫妻がご臨席されることになっていましたので、いかにして万全のセキュリティ体制をとるのが大きな問題となりました。宮内庁と大阪府警のオブザーバーを交えていろいろと策が練られました。お車が通過する道路の交通遮断は当然のこととして、大阪ドームの8ヶ所あるゲートに1ゲート当たり9台の金属探知機を配備すると共に、手荷物もすべて探知機でチェックすることになりました。大会2日目には友愛の家をご訪問されるため、リーガ・ロイヤル・ホテルも同様なセキュリティ体制を取らなければなりません。本人確認のために写真入りの名札を使うという提案にはRIが同意しなかったため、日本人は運転免許証、外国人はパスポートを提示するという案まで真剣に討議されました。

全員が着席した状態で皇太子殿下ご夫妻が入場されるので、開会式参加者を35,000人としても、全員が入場して着席するには3時間以上掛かる計算になります。その3時間をどう保たすのかで議論が百出しましたが、結局、ホスト委員会側の費用でアトラクションをすることになりました。結果的に皇太子殿下はスペイン皇族のご結婚式のために欠席となり、セキュリティ体制は解除されたものの、いったん契約したアトラクションを解約するには莫大なペナルティが課せられるため、当初の計画通りに行うことになりました。

この数年の国際大会を見ても、インターネットやeメールを利用する参加者の姿が目立ち、そのコーナーには長蛇の列ができています。今回の大会では思い切って50台のパソコンを投入してインターネット・カフェを設営しました。大会2日目の終了間際にウイルス騒動が起こったものの、徹夜の作業で復旧することができました。判りにくい場所にあっただにもかかわらず、連日1,000人以上の利用者が訪れて活況を呈しました。ただし、日本人の利用者は極めて少なく、日本人ロータリアンのIT活用の低さに愕然としました。

2009. 11. 13